

カウンセリングにおける人間と科学

安 芸 義 雄

は じ め に

文芸評論家の小林秀雄は「金閣焼亡」のなかで、心理学についてつぎのように言及している。「……………知人の或る女性が発狂して、入院した。精神病の分類などに興味を持っていないから、彼女の病名は聞いてもみななかったが、見たところ、様様な妄想に強迫されている極めて普通型の病人であった。それが、入院してどういう療法を受けていたかと言うと、眼が覚めると、ただもう無暗な騒音だけを発する様に考案されたラジオ装置の如きものの前に、坐らせられていたのである。妄想を起す暇を与へぬというのが、勿論、その目的であり、機械使用代もかさむのである。……………（中略）ラジオ装置はどれも気に入らない。冷酷が間抜けと合体している。まことに、心理学という人心解体の学問は危険な学問である。人間への信頼を失わずに心理学者となる事は難かしい。」

続いて、精神分析の著書は面白く読むが、愛読は不可能であると述べている。そして、ジェームズの「心理学概論」は愛読書の一つであり、それは、心理学の分析的方法の限界に、解体されぬ人格が美しく表現されているからであるといい、彼の学説が旧式であるというようなことは、私のようなしろうとは大した意味はないと語っている。

簡明率直な文字を事実と受けとるか、または比喩ととるかは別として、作家の強いまなざしが人間を対象とする科学に注がれている。文芸評論の仕事が流れ行く時代の一こま一こまのうちに、時代・人心の帰趨をいち早く察知し批判することにもあるとするならば、この文は一部の科学を論評して、科学のなすべきわざを示唆したものといえるであろう。

心理学は長い過去と短い歴史をもつといわれる。19世紀末よりの科学としての心理学の歴史はまことに短い。当時の心理学における精神物理学という分野の名称にはっきり示されているように、先進科学の方法を早急にとりいれていったのである。科学というものが本来そなえている働きである分析、分けるということが人間を対象にした科学にも適用された。それが人間の身体だけにとどまらず、心理、精神をも究極的に腑分けするという点に心理学の意味がかかっていた。

わが国では、人間の肉体の解体にでも、蘭学事始にみられるように、大きな障壁とそれに立ち向う勇気が必要であった。しかし近代の科学は人間の体と同時に心をも、児童が時計の存在の不思議さのために、それを分解するように、自身の感性の腑分けにはげんだ。心理学は自然科学として、冷たく人間を見渡すすべを覚え、人間のもろもろの思念、いくたの情感をあえて見落しながら、行きつく所まで行く惰性と、もはやとどまることを知らぬ精緻さをもって人間を解体し続けていくように見える。人間解体の学としての心理学は、自身の科学としての精細さを誇りつつも、人間から離脱していく傾向をもつことを否

定できない。

科学としての心理学が実験室でその精度を着々と高め、その応用を人間に確かめようとするとき、違和が生じた。そのくいちがいの人々がかすかに感じ始めたのは、職業指導運動を発端にした個人的相談の場面においてであっただろう。そこでは心理テストを基準とした指示的な助言、相談が営まれ、ある程度の成果をあげつつも、教師たちにいらだたしさに似たものを抱かせた。丸い釘は丸い穴にということばで示されるような相談の状態のなかでの違和感から、ロージャズが非指示的方法という正反対のアプローチを提出したことは当然のなりゆきと考えてよい。たとえその方法が、イデオロギーを排除した心理技術にすぎないとか、宗教に近いのではないとか、その他種々の非難を浴びてもなお、現場で悩んでいる人々と接触するケース・ワーカーや教師によって支持されているのは、あまり単純化し過ぎるくらいがあるが、その人間接近への直接性にあると思われる。解体、腑分けは科学の当然の道であるが、人間解体の果てに残された皮相性や間接性や、またはむなしさのなかから、カウンセリングは生まれるべくして生まれたのである。

われわれはここでロージャズにおいて、心理的治療を考えると、人間と科学がいかに語られてきたかをかいま見るのも意味あることと思うのである。

人間か科学か

この論文は心理療法またはカウンセリングという非常に興味深く、報い多い経験をつづけるときに、治療者と科学者という二つの役割の間に、ますます大きなギャップを感じるようになってきたロージャズの書いたものである。

「科学者としての私のきびしい客観性と、治療者としての私の、ほとんど神秘的なほどの主観性との間の距離に、ますます大きな不安を感じるようになってきた。この論文はその不安の結果なのである。」

この書き出しは、論文全体をとおしての基調音である。客観性と主観性との間の距離に不安を感じる。その不安に駆られて論文がつづられていったこと。そのために論述のしかたが一つのドラマの形で対話されていくことになる。第一に治療者としてのカウンセリング関係への発言がなされ、つぎに科学の立場から見た治療の本質が語られ、そしてそれぞれの視点から疑問が投げかけられるのである。最後の節に試案的な、おそらくは一時的である統合の状態が述べられる。その様子をあとづけてみよう。

1. セラピストから見た治療の本質

ここでは治療者の側からの発言がきわめて象徴的に表現されており、自然科学的な読み方をするものから見れば、あまりにも文学的だとの感を強くするかもしれない。

「他の人の内的世界に私が好意を寄せ、それを私が信頼し、それを私が理解するならば、そこにはある重要な生成の過程が生じてくる。」という仮設または信念をもちながら、ロージャズはセラピイの関係の中にはいっていく。生成というのは硬い用語であるが、変化、変容とか自己概念の修正などに置きかえて理解しても大まかには許されるであ

ろう。

「私は一人の科学者としてその関係に入りこむのではなく、また正確に診断し治療する一人の医師としてその関係に入るのでもなく、私はただ一個の人間としてパーソナルな関係の中に入って行くのである。もし私がクライアントをただたんに対象物として見るならば、彼はただたんなる対象物にしかならないであろう。」

このようなカウセンリグ関係にセラピストは自分自身を賭けているのである。クライアントを対象物としてではなく、一個の人間としての関係の中に入りこんでいけば、その場面では、「クライアントは、彼の感情をそのもともとの完全な強度のままで、いわば〈純粹培養〉として自由に経験できる。」

「この関係には多くのセラピストがふれているように〈この世のものではない〉というような性質をもってくる。いわば、法悦の境地といった感情であり、クライアントもカウンセラーも、面接が終了したときには、あたかも深い井戸やトンネルから出てきたような感じをもちながら、そこから出てくるのである。」

「このような瞬時的な関係から、クライアントはセラピイの進行とともに、彼が自分自身になるようになる。自分自身になることがカウンセリングにおける大きな目標である。しかし、自己自身になるということによって、問題が解決されるのではない。感情の経験における、もっと深いもの、もっと高いもの、もっと幅のあるもの、もっと広いものがあるというように新しい生き方が開かれてくるというだけなのである。彼はもっと自己の独自性を感じ、したがって、もっと孤独に感じるのである。」

ここにとりあげられている、生成、対象物として見ないこと、賭け、純粹培養、法悦の境地、この世のものではない感覚、問題解決ではないこと、などのそれぞれの用語は、テクニカル・タームと呼ばれるものではない。むしろそれらは、詩に近いようなことばといってもよいかもしれない。カウンセリングの科学を目ざそうとするものにとっては、不純な混濁へと人々を導くようなものに映ずるであろう。心理学からほかのジャンルへ移行させたほうがよくはないかとの批判が生ずるゆえんである。カウンセリング体験のあるものにとっては、あのような心的体験がこれらの用語に合致するのだらうという符合感があるのだが、突然このようなことばの乱舞のなかにつれてこられたものには、とまどいが大きいであろう。世人にはカウンセリングへの技術としての期待がみなぎっているのである。

かつて、心理学は科学として生れかわり、形而上学的嗜癖にふけてはならないとみずからにいわたした。それを払拭しようとした努力のあとが現代心理学の歴史であった。それをあえて、なぜ再びこのような耽溺を繰り返すのであろうか。そのようなつぶやきがロージャズを読む人々の口からもれてくるように思える。

続いて、やや視点を変えての発言がなされる。

「セラピイの過程を別の面から見るとすれば、それはクライアントによる学習であるということができる。……（略）その最も深いところにおいては、とうてい言語の形に表現できないであろう。」

「このような学習をもう一つの角度から理解するならば、それらは、感情の世界における意味に対して、あとで記号を与えようとする努力であるということができる。クライアントは、あたかも自分がことばを覚えようとしている幼児でもあるかのように、感情や

情緒のことはを学ばなければならないのだと気づくようになる。多くの場合、もっと悪いことには、ほんとうのことはを学ぶ前に、いままで学んできた誤ったことはをすてなければならないことに気づくであろう。」

「この種の学習を規定するもう一つの別の方法をとるならば、それは教えることのできない学習であるといえる。その本質は、自己発見という面にある。セラピーの中で起る重要な学習は、ある人が他の人に教えることのできないものなのである。教えることによって、その学習は破壊されてしまうであろう。」

このような語り口で述べられた治療観は、確かに自然科学の目から見れば異様であろう。だが前半部にくらべて、この後半部には学習という心理学になじみ深い術語が出てくるので、いくらかは理解されやすいようである。さきに純粹培養という象徴的に語られたことがらが、感情の世界における意味に対して記号化する努力であるといわれている。人が過去のまたは現在の体験をそのままに、自由に、生き生きと再生できること、それは正確な記号化の学習をまっしてできることである。これこそが、カウンセリングであり、生きた概念なのである。そのためには過去の死んだ概念を棄て去らなければならない。一般に概念くだきということばで呼ばれていることとその根を同じくすることがらである。

カウンセリングにおける治療を学習であるとの見方に立ちながら、アイゼングの説く治療論とはまったくおもむきを異にしている。その学習は教えることのできぬものであるとか、教えることによって、その学習は破壊されてしまうというような表現に出会うと、また混乱をひきおこすおそれが十分にある。人間の心の動きを表現するという微妙な作業においては、このような形式によらなければならないのかもしれないが、一種の禪問答になぞえられたりするものもその辺に理由がある。これらのことは「わかる」といえば、ことばの端々に気をとられずに一気呵成に理解できる性質があり、逆に「わからない」と反論されれば、まったく混乱におちいるていものである。

さて、ここで科学者としてのロージャズが登場することになる。

2. 科学の立場から見たセラピーの本質

「科学は事象について、および諸事象間の関数的関係について客観的な知識を得ようとする。科学はまた、これらの諸事象の予測と統制の可能性を増大することができるかもしれない。一定の治療関係について、それはある要素をもっているがゆえに、ある結果を、ある蓋然性の限界内で生み出すであろうという予測をすることができそうである。そこからわれわれは、治療関係に含まれている要素を操作することによって、セラピーの結果を容易に統制することができるであろう。」

「セラピーは複雑な現象であるから、測定することが困難であることは、最初からわかっている。それにもかかわらず、すべて存在するものは測定することができるのであり、パーソナリティおよび対人関係の法則を発見するために、その困難を克服しようと努めることはきわめて有意義なことである。」

科学者であるロージャズの分身は、だれにも自明の理である科学の論理を展開する。不屈の科学者たちが、いくたの不成功にもめげず、科学の歴史を創造してきたのと同様に、人間ならびに人間の関係に生起する一見ふしぎな状況を測定し、法則を発見しようと努力

することは現代人のなすべき当然のことだという。そしてクライアント中心療法という自然科学的手法が接近することのはなはだ困難に見える領域にも測定と法則化をおし進めなければならないと説くのである。

ついで、クライアント中心療法におけるいくつかの仮設を取りあげて、それらが科学的方法によってどのように処理されるかを説明している。たとえば

- (1) セラピストがクライアントを受容することによって、クライアントは自己受容を増大する。
- (2) セラピストがクライアントを対象物としてではなく、一個の人間として見るならば、それだけますますクライアントは、自己自身を対象物としてではなく、人間として見るようになる。

第一の仮設については、受容を測定する方法として態度テストが考案された。セラピストがクライアントを受容する度合い、およびクライアントの自己受容の程度がこれで測定することができるであろう。クライアントの自己受容がセラピイの間に変化したかどうかは、セラピイの前後に測定することによって示されるであろう。こうして操作的に定義されたセラピストの受容と、クライアントの自己受容との間に何かの関係があるかどうかについて、われわれは何かの結果を知ることができるであろう。

この結果、もし操作的に規定しうるある条件が、セラピストまたはその関係のなかに存在するならば、ある種のクライアント行動が起ることを一定の確率において予測することができる、公然と述べるようになる。

以上のようにロージャーズはカウンセリングにおける主要な仮設を検討するに当たっての具体的な科学研究のあらすじを素描している。現にカウンセリング研究の何割かはこのような科学的方法にのっとった方式に従っており、これが人々をなっとくさせる最良のものの一つであることは疑いえない。

これまでは冷静なタッチで科学的カウンセリング研究を奨めてきているが、つぎの節では烈しい調子の攻撃が始まるのである。

3. 科学者の疑問

「(1) もしわれわれが、パーソナリティ変容の方法に関する真理として、このような内面的な主観的な経験に依拠するならば、ヨガ行者も、クリスチャン・サイエンスも、あるいは自分はキリストだと信じている精神病患者の妄想も、すべて経験的立場の所説と同じくらいに真であるということになる。」

(経験的立場はクライアント中心療法の立場を意味し、科学的立場とならんで心理療法に関する二つの観点を構成すると考えてよい)

「(2) 経験的な立場は、クライアントのある行動、セラピストのある行動も、その原因を明らかにすることができない、あるいは原因結果の鎖の一環をなしていないのであると述べているようである。このことは一つの敗北主義ではないのだろうか。多くの行動についての原因を明らかにすることが確かにできるのに、なぜある点であきらめてしまうのだろうか？ すべての行動についてその原因を明らかにしようということを、なぜ少なくとも目ざさないのだろうか？ われわれが事実を探求しようとするときに、ある扉はわ

れわれに対して 閉ざされているという 考えによって、それを妨害してはならないのである。」

(3) ここでは経験主義者がどうして、われわれが高く評価しているほとんどすべての進歩を可能ならしめた道具、方法である科学に挑戦しなければならないのかとロージャズはいぶかっている。人間が科学から受けとった利益は病気の治療から始まって、乳児死亡の予防、農産物の多収と改良、等々と生活のほとんどすべてにわたっている。科学が入間の建設的な目標に奉仕したばかりでなく、破壊的な目的にも奉仕し、戦争の方法も変えたことも事実である。しかし、そうではあっても、それを社会的に役立たせうる可能性もきわめて大きい。それなのに、なぜ経験主義者たちは、その同じ方法を社会科学の分野に用いることに疑念を抱くのであろうか。確かにこの分野の進歩は遅々としており、物理学における重力法則のごとき基本的法則さえいまだに確認されていないのだが、じれったいからといって科学の方法を棄て去ることができるであろうか？ 何か別の方法が、同じような希望をもたせてくれるのであろうか？ と科学者であるロージャズは、たたみかけるようにわれわれを説得する。

雄弁に語りかけるのは、われわれだけにではなく、経験主義者としての自分自身に、ロージャズは問いかけている。あまりに主観性を大事にすることを、精神病者の妄想まで真であるのかと問いただしながらがめるのである。ついで人間精神の因果の鎖を究明するのをあきらめてしまう敗北主義だと難じ、いくたの人類生活の向上と宇宙理解に貢献した科学の成長を妨害してはならないと、きわめてきびしい口調で攻撃する。

三つの文章を読めば、論点があまりにも明瞭で、なんら反駁の余地はないかのごとくである。主観性の無意味な重用、原因探求努力の破棄、科学への成長妨害、このようなシビアナな指摘に対して、われわれはほとんど反論の拠点をもたない。

セラピストまたは経験主義者の議論が主観性の復権を主張するように、その発言はまさしく主観的表現をとっている。それに対して、科学者のそれは明瞭にして説得力があった。それでは経験主義者はいかに反論していくのか。ロージャズのなかの科学者がこのようにはげしくセラピストを批判するエネルギーに満ちたものならば、それを受けて立つロージャズもまたかつ目して見る値打ちがあるはずである。

4. 経験主義者の疑問

科学者の疑問は、ある人にとっては、問題を決着させるもののように思われるかもしれないが、そのような批判は、治療経験のなかに生きてきたセラピストにとっては、とうてい満足すべきものであるとは考えられない。セラピストは、科学的立場について、いくつかの問題点を指摘しようとする。

「(1) まず第一に科学は常に他者、すなわち対象物を取り扱う。それは決して経験する自己というものにかかわっているのではないのである。」

この限りにおいて、入間解体、人心解体という作業は、心理治療のようなきわめて個人的で、主観的であり、いずれもが経験する自己であるというような関係には入りこめないであろう。そして痛烈な比喩が科学に対してくだされる。

「科学は治療の中のすでに死んでしまった事柄について検死を行なうことができるけれ

ども、治療の生ける生理に入りこむことはできない。」

(2) 第二の論点は、さきの科学的立場の論旨と同様に鋭くわれわれの胸につきささる。
(長いが全文引用したい。)

「もしわれわれが、未来において、今日、心理学が研究している種々の問題の大部分について解答が得られたと仮定するならば、その時はいったいどうなるのであろうか？ その時われわれは、すべての他者を、いや自分自身をさえも対象物として扱うように、もっともっと強制されるようになるであろう。あらゆる人間関係に関する知識が非常に大きくなり、われわれは非反省的にその関係を生きるというよりは、むしろそれについて知っているというだけになるであろう。

われわれは、愛情というものが、子どものために良いものであるということを知っている知識階級の両親の態度に、すでにこのことを経験していると思うのである。このような知識は、多くの場合えって、かれらが、愛情を持つにしろ、そうでないにせよ、自由に非反省的に自己自身になることを妨げるようになる。」

(3) 第三には、経験主義者が抱いているさらに深い心配についてである。それは、科学の究極の結果は、操作へと導くという点にかかっている。社会科学における知識の増大は、それ自体の中に社会統制への、あるいは少数者による多数の統制への強力な傾向を内蔵しているということである。

「心理学者の見た天国の図絵は、操作の樂園であり、その中では、支配者になることができなければ、人間が人間となることのできる度合いはいちじるしく低められる。」

自然科学的な人間観の見落しているものについて、ロージャズははげしく疑念を表出する。科学者がさきにきびしく問いただしたことに呼応するかのようである。科学は検死をなしうるが、生理にふみこめるのだろうかとか、単なる人間に関する知識をもつことが、どんな意味があるのかとか、究極的には科学による人間操作への反撥にまでいきつくのである。人は操作の樂園をまちのぞむのであろうか、それとも苦難のなかから自己の自由をかちとりたいのであろうかと問うている。

この論点も前出の科学者の発言と同じく、われわれをなつくさせ、心をゆさぶるものがある。在来われわれがもってきた科学はひややかな外貌であった。それは検死官ではあっても、きずをいやしてくれる存在ではないかのようであった。とくに人と人が接する場面における科学性とは、いったい何であったのだろうか？ 手術は成功したが、患者は死んだという話がある。心理的相談場面において、テストは十分科学的にクライアントを測定することはできた、しかしクライアントはその結果をがえんじなかった。このような状況は悩める人が眼前に坐しているときには、無数に数えあげることができるようである。

また、われわれは周囲に、散乱する知識の残骸を見渡す社会に住んでいる。まきちらされた情報や知識を、どれが真に人間の、いや自分自身の知恵となるのかもわきまえずに、単に生体器官内を通過させているのみではないか。非反省的に生きるとは、知識の骸骨をふりほどくことのように思う。そして最後にロージャズは、自己の自由の勝利などという不分明でわずらわしいものをえるよりも、軍服をまとうて統制されるほうがましだと思うようなときがくるのを恐れている。

ここで、かれが使用している非反省的に生きるということばは誤解されやすいと思われる

る。われわれの感覚では、反省的に生きるとは、高い価値を有する生き方だとされている。ロージャズがあえてそれを否定しているのは、反省のなかに含まれている形骸的、形式的、ステレオタイプのな、すべて創造性を圧殺するもの一切を拒みたいからなのであろう。かれは非反省的ということばに新しい意味を吹きこんで語っていると解される。

カウンセリングにおいて矛盾対立する見解が提示されたが、われわれはいずれを選ぶべきなのだろうか。あるいはこの二つの立場をおたがいに、一方を損うことなく、円満に妥協させることのできるような、もっと広い、もっと包括的ななんらかの体系があるのだろうか。

5. 科学観の変化

いままでのような経験主義者と科学者との対立をロージャズは自分自身のなかで葛藤させながら、一年経過する。そしてつぎに述べる「科学観の変化」が第二部の形で、それらの統合、またはかれの努力のあととして提出されるのである。そこでは、はじめに考えられた理論構成のなかで、もっとも基本的な誤謬は科学の記述のなかにあったのだと確信するようになる。

主要な欠陥は、科学を何か「外にある」もの、「知識の体系」、空間的に時間的にどこかに存在するものと考えた点にあったのだとかれは考える。続いて、「人間のなかにある科学」という、かれの提起する最大の命題に議論が移っていくのである。

「科学は人間のなかにのみ存在する。……………科学的な知識は、そのコミュニケーションを受けとる主観的な準備のできている人々にのみ伝達しうるものである。」

「科学は、自分にとって個人的な、主観的な意味をもつ目標や、価値や、目的を追求する、ある特定の人間のなかにおいて始まる。」

「科学者が実験室やクリニックで適切な経験に没入するしかたは、治療者が治療のなかに没頭する場合と同じく、主観的なものである。かれは、自分の興味を抱いている領域を感じとり、それを生きるのである。かれはそれについて〈考える〉というだけではない。」

「直接的な、個人的、主観的経験という母胎のなかにこそ、すべての科学、一切の個々の科学的研究が、その起源をもっているのである。」

創造的に作りあげられた仮設が、果して現実と照合するかどうかの検討において、実験計画、統計的手法の一切は、それ自体として存在するものではなく、それらの重要な選択はすべて科学者によって主観的になされるとロージャズはいう。

科学の研究結果のなかにも、主観的な基礎があるといい、結果の伝達についても、それらを信用しようという主観的準備が被伝達者の側になければならぬと説いている。

科学の利用については、これも主観的経験のなかにのみ存在する。科学は決して人間を非人格化し、統制するものではない。それをなすことができ、それをなそうとするのは人間だけであるといっている。

以上のように、科学観の変化を簡略化しすぎたが、最後に新しい統一として、つぎのように語る。

「治療の関係および科学的関係というものの基礎および根源として、主観的、実存的人

間、およびかれのもっている価値観をすえることによって、問題を書き変え、あるいは論点を見直そうとするものである。というのは、科学もまたその始めにおいては、あたかも治療がその最深部においては、人間との〈われ・なんじ〉の関係であるのと同じように、知覚された対象の世界との〈われ・なんじ〉の関係であるからである。そして主観的な人間としての私は、このいずれの関係にも入ることができるからである。」

簡単なロージャズの抜粋を作ったのだが、要するに、来談者中心療法という考え方をする経験主義者と科学者の二人が一人の人間の心の中に住み、それぞれが互いに相手に議論をいどみ、科学論を戦わせているのである。そして最後に科学観が変化することによって、ようやく一応の和解を見るにいたる。それは科学の主観的な意味を見出そうとした点にあった。科学の起源、過程、結末および利用が、人間の主観的経験の中のみ存在するという判断がこれである。

科学の起源について、梅棹忠夫、湯川秀樹の対談のうちに、これが触れられている。それは「人間にとって科学とはなにか」という書名にもうかがえるように、とりわけ現代的な題目を扱っているのだが、そのあとがきで梅棹はつぎのように語る。

「この対談は、きれいごとの科学論では終わっていない。できあがったものとしての科学の紹介や解説ではなくて、科学を生み出す原動力になっているもの、科学者の心の中にあるドロドロしたものに、いくらかは触れることができたかと思う。」

こういうところに、ロージャズが没入という語で示したと同じような、ただ単に考えるというのではない主観的なかわりの事情が示唆されている。一人は概念化してものをいい、片方はオノマトペを使って語っているが、いわんとするところは符合しているように思われる。科学が何かできあがってしまったもの、何か外にあるもののように考えることへの反撥が両者からうかがえるのである。

科学が人間の中のみ存在するという表現は、一見奇矯ではあるのだが、人間に関する科学の場合、とくに意味深く感じられるのである。ロージャズはもちろん科学一般についてそう考えるのだが、人間科学に限定して考えてみれば、これは何人も肯定せざるをえぬ強いひびきをもって迫ってくる。教育や心理相談などの分野においては、ことのほかそうである。教師に要求されるいろいろの知識およびアンシャウウングのうちで、当然教育観、人間観は鍛えあげるよう努力しなければならない。そして、現代の教師にとって、それらの観の背景になるものとして、科学に対する見解を練磨しておかなければならないことを、ここに付け加えたいのである。

メルロ・ポンティの発言

ロージャズはかれのもっとも親しんできた治療経験というきわめて微妙な、どちらかといえば在来科学の入りこみにくい土俵での体験をもとにし、科学への議論を展開し、新しい科学観の胎動を唱えた。しかし科学の変貌は、もっとも確実にして厳正な自然界の秩序や理性的法則の崩壊という形で、すでにニーチェによって19世紀末に予言されていたのである。

自然や歴史や社会の絶対的な理性的秩序を何らかのかたちで想定し、それを素よくに信頼したという点に近代ヨーロッパ文化形式の特質があるのだが、これらの理性の失権をニーチェはニヒリズムと呼び、20世紀がその猛威にさらされるだろうと予告したのである。

メルロ・ポンティが「現代思想は偶然を意識することから始まる」といったのも首肯できる。理性的秩序が崩壊したのちは、世界も人間の営みもすべてが偶然に見えてくるにちがいない。

このような変革のあらしは、科学の危機という形でヨーロッパを吹きあれた。「数学の危機」とか「物理学の危機」と呼ばれているできごとがこれである。

同様に、いわゆる精神科学や人間諸科学もまた、危機的状況に立たされていた。メルロ・ポンティは、かれの「眼と精神」の序論で、このことをまっさきに問題として提出している。この書は、おそらくは世紀の問題とでもいえるようなものを解決すべき試みとして登場したのである。それは「哲学の危機」と「人間に関する諸科学の危機」と、さらには「科学一般の危機」といわれるものである。

「心理学や社会学や歴史学は、その研究が進むにつれて、あらゆる思考、あらゆる意見、とくにあらゆる哲学を、心理的、社会的、歴史的外的諸条件の複合作用の結果として示そうとしました。心理学はフッサールのいわゆる心理学主義へ、社会学は社会学主義へ、歴史学は歴史主義へ向かったのです。ところが、そのためにかえて、これらの諸科学はおのれの基礎を危うくする破目に立ちいたりしました。事実、もしいろいろな思考や精神の指導原理が、いっでも、精神に働きかける外的諸原因の結果にすぎないとしたら、私は何ごとかを主張する際に拠りどころとする〈理由〉は、実は私の主張の本当の理由ではないことになります。私の主張には〈原因〉つまり外からの決定だけをこととする原因はあっても、理由はないことになるわけです。その結果、心理学者や社会学者や歴史学者のそうした根本仮設さえも、彼らの研究の成果そのものによって疑わしいものになってしましよう」と語っている。

(メルロ・ポンティ 眼と精神 滝浦・木田訳 みすず書房 昭43)

このような情勢から、心理学の領域にカウンセリングの思想が発生したのも当然のなりゆきであったように考えられる。カウンセリングが科学の世界を拡大し、その中で新しい座を獲得しようとする努力を積み重ねているのは、歴史の流れにそっているものといえる。

だが科学観の変化は急速にあらわれるものではないだろう。ロージャズの「人間か科学か」の批判が、主として精神医学の側から、客観主義を擁護するために強くさげばれている。ロージャズが法悦の境地とかこの世のものでないなどと感情を盛りこんだ用語を使用することに、いちじるしい嫌悪の情を示すのである。

われわれは、ロージャズの二つの分身を、いずれかを取って、他は棄てなければならないのであろうか。いまここで、在来の科学的見方（客観主義）をのみとり、経験的立場（主観主義）を簡単に棄てるならば、人間のあまりにも豊饒な意識生活、精神活動を投げうつことになってしまう。逆に、主観主義のみをとるならば、それはある人々が批難するように、中世への逆行を讃美するアナクロニズムとなるかもしれない。

このような逡巡を感じながら、ロージャズのいう新しい科学観への変化について、ポン

ティ風にいうならばこうなるであろうか。

あらゆる人間および人間的行為を心理的、社会的、歴史的外的諸条件の複合作用の結果として示すことではなく、人間のうちにある理由によって示すことをも忘れてはならないということである。科学は人間の中にのみ存在するといったのは、原因ではなくて理由をわれわれのうちに持つ人間として復権したいからである。

(木田 元 現代哲学 日本放送協会 昭44)

左 翼 的 批 判

さてここで左翼的批判に目をとどめておくのも不必要ではなかろう。これは私の知る限りでは偏った意見のようにも思えるが、カウンセリングの基礎を固めるために、そしてその飛躍のためにも一考しておいてよい。

結論的というならば、つぎのようである。カウンセリングは解熱剤かトランキライザーといった対症療法的なものであって、本質的な病原菌の治療ではない。そののみか、現代日本の資本主義体制の中に住む子どもの生活認識や社会認識の芽を摘んでしまう操作的、心理学的技術によるゴマカシである。

そしてロージャズの科学論を心理主義的観念の中での科学論であり、個人の不安や不一致を個人心理学的観念のレベルの現象だけからとらえて、客観的外的条件を無視するカウンセリング理論は出発において欠陥をもってしていると論難する。

カウンセリングの中心概念の一つである受容、とくに感情の受容において、カウンセラーが使うことばは、動物のなき声以上の何ものでもないとまで極言するのである。

もう二三点、その所説を見てみよう。

カウンセリングは、相談室で個人を対象に二人だけでおこなわれ、その内容は秘密にされる。個人の問題が集団や学校、社会全体とのかかわりで話されない。二人だけで、心の問題として解決されるわけである。

来談者の感情を、相談者は共感的に無条件に受容することによって、来談者は自己自身の生成を経験し、建設的、社会的環境に住んでいるかどうか、どんな発達歴をもち現在、どんな能力をもちっているかといった個人の外的条件をカウンセリングは全く考慮しない。むしろその外的条件を来談者がどう知覚しているかが問題になる。だからロージャズのカウンセリング理論では、個人の知覚、自己知覚が中心的な問題となる。

(藤本文朗 学校カウンセリング批判 大阪学芸大紀要 1964)

結局これらの批判は、人間存在の様式に関する力点の置き方に意見の相違をきたしているように思える。つまり、カウンセリングが外的条件、政治的、経済的、環境的と呼ばれる諸条件をほとんど顧慮するところなく、人間に自己知覚や自己概念、自己像のような心理学的観点のみから接近していかうとすることへの不満である。たしかにカウンセリングにおいては自己像の問題は大きくとりあげられており、キイになる概念である。しかしこれが、資本主義体制の中でのみ発生しうる考え方であり、社会主義国では無用のものであるような見方はうなづけない。そこでは人間は、政治、経済的、外的条件のみで行為し、自己像などとは関係ないのであろうか。とうていそう考えるわけにはいかない。

経営学その他の資本主義的学問領域に、それらの概念群が巧妙にとり入れられ、労働者から社会認識の萌芽をつみとり、すべてのことを自己自身の責任に転嫁させているという議論もある。しかし社会認識とは何であるのか。かつては、疎外の実感を形成していた物質的な飢えが失われ、生活水準がいちじるしく向上した現在、飢えからの解放を進めるための社会認識がわれわれの行動の起動力になりうるのであろうか。もちろん人間行動の物的外的条件を無視せよとは絶対にいえないにしても、すくなくとも自己自身に理由をもった人間の存在を、単純に否定はできないし、また否定したくないのである。

カウンセリングが人間の心理的レベルでの問題にかかわっているのみで、他の水準での生活を放棄していると非難しているが、これにも異論があるであろう。この非難が当たっているのは、構造主義者のいわゆる近代主義的科学のらち内にいる心理学のみであろう、人間への心理技術的接近をこころみているのは、まさしく近代主義的心理学であり、カウンセリングはそこからの脱却を企図しようとするイメージに満ちたものである。カウンセリングが何の人間と接触しているのかと問われるならば、人間のいかなる層またはレベルとでもそれはかかわっていると答えるであろう。それは過去の決定論的思考と、近代主義的、原子論的思考を同時に克服するために、新たな全体としての人間にかかわっていかうとするものである。

現 存 在 分 析

ロージャズの科学論にまっこうから、否定的態度を持する精神医学者が多数であるなかに、一部の学者はやや特殊な方向を指向しつつあった。研究室で精神医学の専門的研究に没頭している学者や、実験室でアカデミックな研究に余念のない心理学者よりも、かえって臨床の現場で一人一人の患者と直接に接触している精神医たちのなかに、従来の精神医学を支配してきた自然科学からのみの観点から脱却しようと努力する動きが見られるようになった。メダルド・ボスやビンスワンガーをその指導者とする現存在分析は、家庭、職場、学校などの問題に苦悩するひとの側に立って心をくだしているケース・ワーカなどからも受け入れられ始めている。

このような難解で、ペダンティックにも見える特殊な学問は、哲学づいた一部の人たちにとりあげられることはあっても、しよせん、大きな精神医学の潮流に乗ることはなく、あだ花におわるのであろうと学界でいわれながら、現場で患者と直接触れ合っている人たちへの心の支えともなり、その滲透力は無視しえないのではなかろうか。これは正統派の心理学実験室からは一種の異端視をされながら、一人一人に接する教師やケース・ワーカたちにロージャズやブーバーの考え方が介在物なしに琴線に触れていくのと同様なことがらに思われる。

期せずして、心理学と精神医学の分野から、カウンセリングの思想とその技術、および現存在分析という二つの流れが生み出されたのは偶然とは思えない。この二つの思想は双生児とはいわないまでも、それぞれの親の科学が、量子論物理学者マックス・プランクが繰り返して使ったことばである「人間からの離脱」をますます進行させつつある時点で生

誕した鬼っ子のような存在であるようにみえる。たとえ、それらの親から望まれなかった子どもたちが、政治や経済の問題を見落しているとか、歴史的観点を見失っていると非難され、またその表現があまりにも文学的すぎるというそしりを受けつつも、かえってそのゆえに、人間一人一人のあまりにも個人的な悩みに十分応えうる資格をも有していることになるのではないか。

筆者はここで、マルチン・ブーバーの所説を引用したい欲望にかられる。ロージャズから現存在分析にふれると、その道行きはブーバーにいたるであろう。

(荻野恒一 現存在分析 紀伊国屋書店 昭44)

ブーバーの危機感

かれは「仕事の背後への人間の落伍」という表現で、人間が自分自身によって生み出した世界を、もはや支配することができにくくなった状況をあらわした。

「現代は、人間の魂の衰弱と挫折とを相ついで三つの領域において体験した。」

第一の領域は技術である。第二は、経済であり、第三は政治である。機械は人間を自己に奉仕させ、商品の生産、交換の営みは人間の命令を離脱するような事態が生じ、政治においては、戦争のように、人間は不可解な力に付託されてしまっているようである。

このようにして、人間は自分のデーモンの生みの親でありながら、しかもその支配者となることができないという恐るべき事実と直面したのだとブーバーは説いている。これは現代人に広く^び瀰漫した考えである。そして、つねに欲求不満をぶつける対象として、技術、経済、政治をもってくる。あたかも、これらのものがわれわれを不幸におとし入れたのだといたいのであろう。だがしかし、われわれは問題の核心を見失ってはいけない。高度の技術革新による機械化が人間存在を非人間化しているのではないということ、ブーバーもまた、そのようにいっているのではないということを忘れてはならない。

危機的状況の真の核心は、このような技術や経済や政治の領域を生きる人間が、ブーバーのいわゆる〈われ——それ〉の根源語の支配のなかに自己を埋没してしまっているということにある。いいかえるなら、もはや人間が〈われ——なんじ〉という根源語を発するよろこびを失ってしまっているということである。私たちが、他者を〈それ〉として見出すのではなく、他者に〈なんじ〉としてかわるときに出会いがある。真の生は、そのような〈われ〉と〈なんじ〉との生会いをとおして開かれるのである。

ブーバーと佐古の引用は、さきほどの社会主義的にみえる批判とはまったく逆の方向を指し示している。そこではもちろん、技術、経済、政治における危機を指摘しつつも、それらのみが人間の魂をおとしめているのではないことを強調している。〈われ——それ〉の根源語のなかに溺れたわれわれは、〈われ——なんじ〉の根源語を発する喜びを見失ってしまっている。それこそが真の危機的状況なのであると説く。セラピストがクライアントを一つの対象物としてではなく人間としてみることは、個人的主体性の頂点ともいえるべきもの、このようなものの欠落こそが、われわれをして非人間化させているのである。

(佐古純一郎編 現代の信仰 現代人の思想3 昭42 平凡社)

分析を許さぬもの

いままでに、ロージャズ、現存在分析、ブーバーと並べてくると、私はずいぶんいわゆる形而上学的偏向を、せっかく客観科学としての努力を長年続けてきた心理学のなかへ持ちこもうとしているようである。だが私のなかにも上山春平が述懐し、ロージャズ自身の胸のうちに激しく戦っている科学者としての自分を再認したい気持ちを押えることはできない。上山曰く、「人間とは何か」という問いを追求するには、その問いを「自分とは何か」という問いにおきかえて主観的に追求する道もあり、「自分を含めて人間という生きものは一体何であるのか」という問いにおきかえて客観的に追求する道もある。私などは、もともと前者から出発しながら、途中で、両方歩いてみなければ本当のことは分らないのではないかと気づいて、客観的な道を歩いてみる決心を固めたようなぐあいなのだ。

（上山春平 照葉樹林文化 中公新書 昭44）

このように、つねにゆれ動く二つの分身は、分析を許す人間と、分析を徹底的に拒否する存在としての人間のたえざる往来のようである。もちろん分析が悪徳であるはずはない。むしろそれは美徳なのである。過去、現在の莫大な生活利益はその結実である。しかし、あらゆる場面で美徳であるようなことは、われわれには考えることができない。

児童の知能と保護者の職業との関係を探索するような研究をのみ科学的というならば、つまり人間の資質や行為を外条件との関数関係においてみることにのみ専念すれば、そのような科学でとらえうる人間は表層的人間にしかすぎぬ。児童たちは、そのように分析されうる存在の人間である半面、彼らは分析の指の間からもれ出る液体のようにこぼれ落ちているのである。われわれは分析の果てに遠望される砂漠をレンズをとおしてみるだけで事がすむとは思っていないのである。

ロージャズの論文は、あえていうならば、科学的研究というよりは、新しい科学へのイメージを提出したものと考えてよかろう。それは人間が自然科学的な対象としてあつかわれ、人間固有の条件が意図的に排除されている状況への不満にいろどられている。そして本来、科学自体も、自己の状況、つまり主観性を無視しては成立しないことに注意を喚起した。とくにそれが人間を対象とする科学であるかぎり、対象となる人間の主体を除外しては成立しえないし、たとえ自然を対象する科学でも観察者の状況がつねにかれの操作を制約するものであるということを指摘したのである。